

---

# 現代妖奇異聞録

ルナサー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現代妖奇異聞録

### 【Nコード】

N0461Z

### 【作者名】

ルナサー

### 【あらすじ】

妖怪や物の怪といったモノ達が出没する町で、日常を守る二人の少女。彼女達は、現代における陰陽師を名乗る……。といったら力ツコいいけど、学校生活に、妖怪退治。今日も二人でがんばってます……。

## 序夜 陰陽師（前書き）

どうも、ルナサーです。

一話完結型である、この現代妖奇異聞録、楽しんでいただければ幸いです。

## 序夜 陰陽師

日常に日常ではない 即ち、非日常 が干渉する町、上弦町<sup>じょうげちやう</sup>。夜は人ならざる者、怪異や物の怪達の時間。その夜に、巫女姿の二人の娘が、何かを追いかけ走っていた。一人は、月明かりだけでもよくわかる茶色の髪をポニーテールにし、真っ黒な目をしている。もう一人は、光を拒むセミロングの黒髪に、夜闇に赤く光る目。だが、明かりの前では黒い目をし、そして首には、幅の広いチョーカーを付けている。

その二人が追いかけている相手は、白い長髪の若い女。その額には、角が生えている。

「このっ、待ちなさい！ 鬼女<sup>おにめ</sup>！」

「今夜こそは逃がさない！」

待て、と言われて待つ者はいない。それが、人ならざる者であっても同じこと。案の定、

『待て、と言われて待つ愚か者がいると思うのか?!』

と、返された。当然、速度は落ちない。狭い路地を上手に曲がる。茶髪の娘が舌打ちした。

「らちがあかない……。未希、はさみ撃ちにしよう！」

「了解、結美。じゃあ後で」

未希 佐伯未希<sup>さへき みき</sup>は、鬼女が真っ直ぐ通った十字路を右に曲がって行った。結美 神城結美<sup>かみづき ゆづり</sup>は、鬼女を追って真っ直ぐ進む。上弦町は彼女達の庭のようなもので、どこを通ればどこにつながるかをよく理解していた。だから、行き止まりに誘導するのも簡単。誘い込んだ行き止まりの壁はどれも高い。幾ら鬼女でも飛び越えられない。

『な……。行き止まりだと……』

「さあ、観念して貰おうか……」

結美が札を取って鬼女に言う。未希は到着が少し遅れて結美の隣に立つ。鬼女は観念したようにゆっくりと振り返った。が、

『こんな所で捕まってるものか!!』「!!」

と、腕を刃物に変形させて結美の首を斬ろうと襲いかかった。咄嗟のことで反応が遅れた結美を、未希が突き飛ばす。鬼女の腕はコンクリートに突き刺さった。そのから空きの横腹を、未希は容赦なく蹴り飛ばす。手加減無しで出された蹴りを、守ることもせず受ければ、人であろうとなかろうと気絶する。もちろんこの時もそうで、鬼女は吹っ飛ばされて気絶した。

「ありがとう、未希。じゃ、封印するね」

「お願い。今日は札を忘れた」

結美は、札に印を施し鬼女に張り付けた。鬼女は、その札の中に吸い込まれて消えた。

「お疲れ様。陰陽師さん達」

背後から、男の声が聞こえた。振り返った二人はあからさまに、面倒だ、という顔をした。

「「……こんばんわ、新堂所長……」」

新堂所長 新堂修司しんどうしゅうじは、優しい微笑を浮かべた。

「まだ、鬼女以外の目撃証言はない。今夜の仕事はこれで終わりだ。

……それはそうと、君達は鬼女を式神として使うかい？」

「……私は使わないけど、結美は使う？」

「いや、私も使わないよ」

「そうか……。じゃあ貰うよ?」「どうぞ」「」

修司は、嬉しそうに鬼女が封じられた札を受け取った。帰ろうとする修司を結美が慌てて呼び止める。

「ちょっと所長! バイト代! すっぱかす気ですか?!」

「おおっと、忘れてた。今回は契約人がよかったからね。はい、十万ずつ。じゃ、本当にお疲れ様。陰陽師さん達」

未希と結美に十万ずつ渡すと、今度こそ帰って行った。彼が暗闇に消えると、二人も互いに挨拶を交わして家に帰って行った。

“陰陽師”と修司は二人を指してそう呼んだ。この二人が上弦町の夜の非日常を彩る、怪異とは違う“色”だ。彼女達は怪異を封じる者。日常を維持していく切り札なのだ。

## 宵夜 神隠し

少年が一人、桜の蕾が揺れる夕暮れ時を歩いていた。遊びに夢中で帰るのが遅くなったようだ。暗いのは怖い、と少しだけ急ぎ足になる。近道するために公園を横切ろうとした時、声が聞こえた。

「ねえ、こっちにおいでよ。一緒に遊ぼう……」

その夜、その少年は家に帰って来なかった。

鬼女を封じてから二日間、特に怪異の目撃情報、噂は無かった。

高校生である二人の情報源は高校生活での噂話。これが一番役に立つのだから怖いものだ。

「ねえねえ知ってる？ 行方不明者の話」

未希に部活の友達、鎌原紗季かまはらさきが言った。彼女は未希と同じ陸上部員で、噂話が大好きなのだ。大体、未希の怪奇情報の情報源は彼女だ。

「？ 行方不明者の話って何？」

「最近、昼に外に出て夜帰って来ないって人多いんだって」

「……そのうち帰ってくるって」

「それが、もう一週間位帰ってないらしいよ」

「え……？」

一週間位、その言葉に未希は反応した。鬼女を封じたのが二日前。それより前から行方不明者が出ている。噂も情報も無かったはずだ。何故、という疑問が彼女の中を駆け巡る。所長が情報を掴んで無かつただけだろうか。

「始め家族は家出だっと思ってたみたい。でも、増えたのは昨日からあたりらしいよ。問題視され始めたのも昨日から」

「（そういうことか）……そうなんだ。じゃあ、もしかして……」

「そ。全部活停止。部長が言ってた。伝えたからね！」

こんな事が起こる度に部活中止。部活の為に登校しているような

ものなのに、と未希はため息をついた。

チャームが鳴る一分前。クラスが違う紗季は慌てて教室を出て行った。それから昼休憩までの授業の内容は未希の頭には全く入ってなかった。席が後ろなのをいいことに、結美にメール。もちろん、バレないように。しかし彼女はメールを送信した後、見事に教師に携帯が見つかり、没収されなかったものの説教を受けた。

昼休憩に結美のクラスに弁当を持って行き、食べながらその話をした。

「うーん。その情報は侮れないなあ。……そうだ！ 帰り、寄ってみようよ。もしかしたら、そのまま仕事になるかも知れないけど……」

箸を咥えながら、結美は言った。行儀が悪い、と呟いた未希は口の中にある物を飲み込んで結美に返す。

「賛成。じゃあ、終わるまで待ってて。こっちのSHRは長いから」「了解」

やはり五、六時間目の授業も、未希は心ここにあらずの状態だった。

学校帰り、二人は家とは正反対の方角へと歩いていった。不気味だから、学校では近寄るなど言われている家。そこはある事務所。未希と結美のバイト先。入るのも気が引ける。

「入りますよ、新堂所長」「……」

「……返事がない、留守のようだ。と、いうわけで結美、帰る……」「いや、ゴメン！ 居るから！ 居るから帰らないで……！」

未希の言葉に、奥から慌てて修司が出てきた。いつものサラリーマンのようなスーツではなく、上下ジャージ。似合っていないジャージに笑い出しそうなのを堪えて、結美が学校で聞いた話をしようとした。が、

「……その話は中の方がいいね。外で、誰かに聞かれちゃまずい」



という事で、不気味な家……事務所の中に入った。

中にはいろいろな、彼女達曰くガラクタ、修司曰く大切なもの、が足の踏み場がない程溢れていた。修司は“ガラクタ”を避けながら、二人はそれを蹴り飛ばしながら奥の部屋に入った。

「まあ、君達の話をしつくり聞いている時間はない。こつちにも依頼はきている」

情報早いなど、呟いた結美と未希の前にお茶が運ばれて来た。お茶運びをする人でも雇ったのだろうか、と二人は顔をあげると、そこには二日前に封じた鬼女がニコニコしながら立っていた。

「えっ、ちよつ、オイ、新堂所長?! 何やってるんですか?!」

「? 驚く必要はないよ、結美ちゃん。ただ、お茶運びを雇うお金が無いから、彼女にやって貰っているだけさ」

普通は驚く。驚くなという方が無理だ。彼女を普通の人が見ても大丈夫なのだろうか。

『我をお前たち以外の者が見ても、鬼には見えぬ。我はそういうモノだ』

二人の心を見透かしたように鬼女が言う。

「……そう……ならいい」

それに呆れながら、未希は返した。

鬼女のせいで話がそれってしまったね、と修司は言う。机の上のファイルを手を取った。

「行方不明者に共通しているのは、帰り道にある公園を横切った、ということだ」

「……その公園はどこなんですか? この町の公園は二つですよ」

「もちろんわかってるさ、未希ちゃん。上弦第二公園だ。不気味な噂が絶えない所だよ」

うわあ、と結美が呟いた。彼女が帰り道にたまに通る所だ。不気味だが、横切ると近道になる。修司はなおも続けた。

「夕暮れ時の事件だから、今から仕事になるよ。準備は大丈夫?」

「大丈夫な訳ない。確か、札預けていたと思うんだけど……」

札がなければ怪事件の解決は難しいものがある。人ならともかく、人ならざる者ならの話だ。

学校帰りの仕事に備えて、二人は怪異事件の解決に必要な物を彼に預けている。

「ああ、かなり預かっているよ。二人合わせて四十枚位」

「私は式神の札二枚と、普通のやつ十三枚。結美は？」

「十三枚も要るの……？私は式神の札二枚と、普通の札十枚でいいや。そんなにあってもしょうがないし」

「分かった。鬼女、金庫の中にある。持ってきてくれ」

『うむ』

鬼女が帰って来るまで、お茶を飲みながら、どのような状況で遭遇したのかを修司はわかり易く二人に話した。

夕暮れの道を二人は言われた通り急ぎ足で帰った。例の上弦第二公園をよこ切ろうとした時だった。

「ねえ、こつちに来てよ。一緒に遊ぼう……」「！」「！」

声のした方を未希と結美は同時に見た。そこには、可愛らしい少年が立っている。結美が、警戒していることに気付かれないように少年に言う。

「いいけど、何して遊ぶ？ 私達、暇じゃないの」

「何でもいいよ、お姉ちゃん達。遊んでくれるなら、何でも……」

少年は楽しそうに答える。結美の警戒心が強くなったのを、未希は感じた。結美の手をさり気なく握り、未希は反対の手で札を取る。彼女には、結美が連れていかれそうに見えたのだ。それは、あなたが間違いはなかったようだ。結美の緊張が目に見えてとける。

「そうね。じゃあ、こんな遊びはどう？！」

未希は少年に向かって、いきなり手に持った札を投げつけた。それは少年に張り付く。甲高い悲鳴が静かな公園に響いた。張り付いた札が地面に落ちた時には、少年は気絶して倒れ、その子の背後から巨大な蜘蛛が飛び出し、二人に襲いかかってきた。

飛び出した巨大な蜘蛛の攻撃を、二人は左右に分かれることで辛うじて避けた。蜘蛛は未希の方を向いた。標的は未希のようだ。確信した彼女は、気絶している少年とは逆の方向へ走り出した。

「未希！ 公園から出るの?!」

「出ない！ 結美、あの子お願い。多分、神隠しに遭った子だ！」

叫んだ結美に未希が返し、結美と少年からなるべく離れる。結美が少年の方へ走ったのが見える。適当に離れた所で足を止めると、薄ら笑いを浮かべ、学校カバンから別の札を取り出し、少年の言葉を真似て呟く。

「さあ、一緒に遊ぼうか……」

結美は未希に言われた通り少年の方へ走った。気絶している少年に張り付いていた札は、何かを封じた証拠に黒ずんでいる。札を地面に置き直し、彼女は印を結ぶ。置いた札から、小さな蜘蛛が出てきた。結美はその蜘蛛をつまみ上げて言った。

「他に隠した人は何処？ 案内して」

蜘蛛を下ろすと、それは公園の隅の公衆トイレに向かって進んで行った。結美は札を持ち、起きる気配のない少年を背負ってその後について行った。

未希は、激しい蜘蛛の攻撃に苛立ち始めていた。避けるだけで精一杯になりつつある。

「……何でこいつ、怒っているの……？ 繁殖期だったっけ……？」

繁殖期なら、この蜘蛛は子持ち。大量に行方不明者がでるのも頷ける。そして、厄介極まりない。取り出した札を蜘蛛に投げてみるも、効果は薄いし簡単に引き裂かれた。そして、それどころか、

「お……つと……まさか、マジギレ……？」

もっと怒らせたようだ。体を使った体当り、足を使って周囲を薙ぎ払う攻撃以外に糸吐きまでついた。気が付いたら、未希の背中にフエンスが当たる。後ろにはもう下がれない。蜘蛛が足を振り上げる。

未希はとつさに、足の下をくぐって蜘蛛の後ろにまわった。やつと息を吐いた未希はカバンから別の、模様の入った札を取り出した。蜘蛛は、崩れたフェンスから足が抜けてないようだ。未希は札に息を吹きかけ、呟く。

「出番だよ……。かまいたち……」

蜘蛛の後ろ足二本を風が傷付ける。未希の周囲に長い体のイタチが現われた。

子蜘蛛のあとをついて行った結美は、公衆トイレの後ろの蜘蛛の巣に人が捕らえられている事を確認した。蜘蛛を札に戻し、背負った少年を降す。繭状になっている人とそのままの人がいる。結美は、ため息をつくと学校カバンから模様の入った札を取り出し、息を吹きかけて呟いた。

「頼んだよ……。烏天狗……」

「……御安い御用……」

年老いた男の声が、すぐ隣から聞こえた。手に羽根団扇を持ち、翼のはえた老翁が現われた。彼は、蜘蛛の巣と捕らえられている人々を見て眉をひそめ、主である結美に言った。

『相手はどうやら、女郎蜘蛛のようじゃのう。子持ちの封印は苦勞物じゃろうな』

「……うわぁ……。早く終わらせて未希を助けに行こう……」

女郎蜘蛛、巨大なメスの蜘蛛の妖怪だ。人を食い殺しそれを養分に生き、繁殖期になれば人を攫って卵を産み付ける、少々厄介な妖怪だ。

烏天狗は、御意、と言うと羽根団扇で風を起こした。その風は蜘蛛の巣を一瞬で粉碎し、繭状になっている人の糸をも切り刻む。捕われていた十五人全てに札を付け（何故か札は十七枚あった）、産みつけられている蜘蛛の子、土蜘蛛を取り除く。トイレの反対側から、まだひどい音が聞こえる。結美は札を回収すると、そちらに烏天狗と共に向かった。

足を斬り裂かれたことに気付いた蜘蛛は、声にならない悲鳴をあげ、やっと後ろを向いた。面倒くさいという顔のまま、未希はかまいたちに指で指図する。頷いたかまいたちは、その身を回転させ、再び風を起こした。蜘蛛が吐き出した糸は、風に切り裂かれ未希に当たらない。風は徐々に蜘蛛を攻撃していく。蜘蛛は何度も身悶え切り刻む風を避けようとしている。が、

「……………見苦しいな……………。助けたくなるけど、人の為だから……………。大人しくしてね……………」

かまいたちが起こす風が一段と強くなる。未希の身長よりも高い蜘蛛の前足が千切れた。蜘蛛が声にならない悲鳴を上げ、前のめりに倒れ込んだ。未希はかまいたちと共に後ろに飛び去ると、蜘蛛の顔の辺りから再度攻撃を開始させた。そこに、結美が烏天狗と共に駆けてきた。

「未希、大丈夫？」

「大丈夫、もう終わる。行方不明者は全員助け出せたみたいだね」  
「うん」

『……………女郎蜘蛛にしては小さいのう……………。まだ、子を育てたことのない子供じゃな』

烏天狗の言葉に、結美は自分の式神を見たが、未希は反応しなかった。もう、蜘蛛は動かない。辺りに青黒い体液が飛び散っているが、そのうち蒸発するだろう、と未希も結美も気にしなかった。

「結美、この蜘蛛貰っていい？」

「いいよ。不気味だから、私は使わない」

「ありがとう」

結美に許可を得て、未希はかまいたちを札に戻した。そして、何も書いていない札と筆ペンを、カバンから取り出した。結美は烏天狗を札に戻して未希から離れ、未希が空中に字を書いていくのを見ている。筆ペンを振って片付け、文字と共に札を蜘蛛に向かって投げた。文字が蜘蛛に絡まってから、札の中に消える。彼女がそれを拾

い上げた。

「仕事終了」

二人の声が重なった。もう、辺りは真っ暗だ。結美がそれに気付いて、慌てて家に向かって走って行った。じゃあ、また明日、と未希に言うのは忘れなかったが。親のいない未希は帰っているであろう兄の顔を思い浮かべながら、救急車を呼んだ後、家に向かって歩いて帰った。

後日談だが、次の日の朝、救急車で運ばれていった十五人は行方不明になった日以降の記憶がなかった。そして結局、犯人が見つからないこの事件は、世間で神隠しと呼ばれることとなった。

## 深夜 虎

深夜。町が、人が、動物が寝静まり返る時間。その中を歩く、奇妙な影。その影に名を付けるとすれば、それは虎。

女郎蜘蛛を封じた翌朝、結美はいつもより少し早く家を出た。理由は特に無いが、家に何となく居づらかった。昨日結局、こんな遅い時間まで何をしていたのか、と母親に怒られたのだ。バイトは許されていても、バイトと部活以外で遅く帰って来ることは許されていない。昨日は急ぎよ入った為、連絡を入れそびれたのだ。

「おはよう、神城さん。今日は早いよね」

「おはよう、佐藤さん。今日は家に居づらかっただけ」

佐藤明日花は結美のクラスメイトだ。おしとやかと言っ言葉を体現したような人で、大抵誰よりも早くに学校へ来る。部活はしていないらしい。結美は彼女と少々話をする程度で、友達という程ではない。そんな彼女が結美に、言いづらそうだが話し掛けてきた。

「神城さんは、この近所で虎を見たことがある？」

「虎?!」

突拍子もないことに、結美は思わず素っ頓狂な声を上げた。すぐに明日花が静かにするようジェスチャーで言う。

「ご……ゴメン。でも、何で虎？ 犬や猫ならまだしも、虎は普通見ないよ」

「だよね……。でも昨日の深夜、変な声があるなって起きてみたら、道路に結構大きい虎がいたの」

「? 寝ぼけてたんじゃないの？」

「違うよ。母さんも、父さんも見たって……。神城さんの家って私の近所でしょ？ だから聞いてみたの」

確かに、結美の家は明日花の家の近くだ。だが、深夜まで起きている程夜更しはしないし、昨日はバイト疲れから早く寝た。特に変

な声はしなかつたはずだ。

「分らない。疲れて寝てたから……」

そう、と明日花が言ったのを聞いたかと思うと、今度は教室のドアが勢い良く開いた。誰が来たのか、と二人はドアの方を見た。そこには、

「あ、おはよう、中条君」

「あ、おはよう中条君。バスケット部、朝練無かつたの？」

「ねえよ。あつたとしても今日は行かねえ。それより佐藤、神城、

昨日の夜虎見なかつたか？」

入ってきた中条<sup>なかしゅん</sup>佑都は、突然二人にそう聞いた。彼は、上弦高校のバスケット部副部長。結美と未希の通う上弦高校はスポーツがさかんだ。その中で、バスケット部は全国で優勝した経験のある強豪。その副部長が朝練を休みたくなるほどの事件のようだ。

「やつぱり！ 中条君も昨日の夜見たんだ！」

「え？ なに？ 結局見てないの私だけ？」

「なんだ、佐藤は見たのに神城は見てねえのかよ……」

若干落胆したように佑都は言った。やはり、彼等にしてみれば重大な事件のようだ。それから次々と登校してくるクラスメイトは口々に、昨日の夜虎を見たか、と話をしだした。中には、結美と同じように見ていない者もいたが、殆んど全員がそのことを知っていた。朝のSHRが始まるまで、少なくとも結美は、話に入れない孤独を味わっていた。

一時間目終了後の休み時間に、未希が教室に来た。いつも通りの無表情に結美は少しだけホッとした。

「おはよう、未希。珍しいね、休み時間に来るなんて」

「おはよう、結美。クラスに居づらくてね。みんな、虎の話で盛り上がったから」

やはりそつちも同じか。結美は少し嬉しくなった。一人では無かつた。

「せつかく来てくれたのに悪いけど……、私の次の授業、体育なん



だ

「……体育か……。なら帰る。居づらいけど……。後で話そう、じゃあね」

「じゃ、後で」

未希が教室から出ていく。結美も、体操服を持って更衣室へと向かった。彼女達は二年で、廊下には中庭が見えるよう窓が付いている。その窓に、同級生たちが張り付いて中庭を凝視している。

「……ウソ……。本当に居たの……？」

「本当にいたんだ、虎……」

口々に漏れる、感嘆の呟き。結美も窓から校庭を見た。確かに、虎がいる。だが虎は、結美が見た途端霞みのように消えた。周りの生徒は、あつと声を上げ、消えた、と呟いた。

結美は、遠目で虎と見えたモノに多少の不気味さを覚えながらも、更衣室へと駆けて行った。その後結美は、昨日の未希同様、昼休憩まで心ここにあらず状態だった。体育の授業でも、怒られたのは言うまでもない。

昼に来た未希に、校庭で見た虎の話をする、案の定彼女は渋い顔をした。

「……消えたつて所が気になるなあ……。でもなんにも起こってないなら、仕事にもならないし。でも、気になるなあ……」

「気になる、しかさつきから言っただけよ、未希。とりあえず、所長にはメールしてみた。返って来ると思うよ、そのうち」

うん、と気のない返事を返してきた未希に、若干不安に思いながらも結美は、未希と共に弁当を食べ終わった。

「今日、私部活だから、先帰ってて」

「了解」

未希は陸上部所属している。週五の部活だ。一応、結美も部活に所属しているが、書道部は週一の部活である。しかも基本、未希と共に帰れない。分かっただけでも、必ず未希は部活の有無を結美に言

つて行く。中学校からのクセのようだ。

六時間目の授業の最中、メールが入った事が分かった。バレないように携帯電話を開く。メールの返信、修司からだった。虎に関する依頼は来ていないが、調べるのは構わない、と書いてあった。詰めていた息を吐くと結美は、当たらないことを祈りながら化学の問題に取り掛かった。

SHR後結美は、未希が部室に走って行くのを遠目で見てから学校を出た。とりあえず、急ぎよ仕事が入った、と家族に電話して虎の搜索を開始した。学校から離れた場所で、カバンの中に忍ばせていた札を取り出す。模様の入ったそれに息を吹きかけ、呟く。

「土蜘蛛、おいで……」

札の上に小さな子蜘蛛が乗る。昨日、結美が封じた蜘蛛だ。子供だが、ワラワラいると搜索の手伝いになる。その調子で十五匹全て呼び出すと、一匹残して散らせ、虎を搜索させた。

子蜘蛛を散らせてから一時間が経過した。摘み上げていた一匹が盛んに足を動かし始めた。まるで、降して欲しい、と言わんばかりに。

「見つけたんだ。いいよ、案内して」

子蜘蛛を降すと、小さな足でとことこと歩き始めた。結美はその後ろで子蜘蛛を踏まないように気を付けながら歩く。近くの曲がり角を曲がったその場所に、校庭で見た虎が居た。居たというより、他に放していた蜘蛛の吐いた糸に足を取られてもがいていた。子供とはいえ、吐く糸はかなりの強度を誇るようだ。

「なんだ……。この間抜けな光景……」

呟かざるを得なかった。

子蜘蛛を一匹ずつ片付けるのも面倒だったので、まとめて札に息を吐いて片付けた。普段なら、式神にその札を張り付けるのだ。

蜘蛛が消えたことで、虎に絡んでいた糸が消えた。虎がゆっくりと起き上がり、結美の方を向いた。その顔は、虎ではなく猿。見え

にくかった尻尾は蛇だ。胴体と足の部分だけが虎。結美は思わず独り言を大声で言っていた。

「又エじゃん！ 誰だよ、虎だって言った奴！！」

又エ、猿の顔に虎の体、尻尾はへびという日本の古くから伝わる妖怪だ。何故この又エを虎と勘違いしたのだろう……。

どうでもいいがこの声に又エが反応し、結美に飛び掛った。彼女は、出会い頭の一撃を避けて戦闘体制に入った。ものは試しと、又エの顔面辺りを自分の手で殴ってみるが、手が痛いだけで効果が無い。

「なんか、腹立つなあ。……仕方ないか、生身だし……」

呟くと、カバンから札をだし、息を吹きかけて烏天狗を呼び出した。出てきた烏天狗は、又エと周りを見て不思議そうな顔をした。

「おかしいのう……。周囲の人間が何故、こんな騒音にも関わらず出て来ないのか……」

「……？ 確かに。普通なら、誰か来るね……」

不思議に思いながらも、結美と烏天狗は又エの攻撃を避けた。天狗は持っている羽根団扇を振って風の刃を作り出し、又エを攻撃した。が、

「……全く効いとらん……」

「だね……」

顔を左右に振っただけで、効いている様子はない。又エは、仕返しとばかりに尻尾の蛇や、虎の爪で攻撃してくる。結美は攻撃を回避しながら、何故だか無性にイライラしてきた。原因は恐らく、彼女の式神が押されているということ。だが、一度に二体の式神を操ることは普通出来ないし、この状況で式神を変えるのも無理な話だ。しかし、又エは攻撃の手を緩めようとはしない。

（烏天狗を変えなければ……まずい……！）

結美は直感で気付いたが、手遅れだった。又エの尻尾の蛇が、烏天狗の右腕を喰い干切っていったのだ。

『ぐう……。やられたわい……！』

「っ……。これ以上は危険だ……。戻って、烏天狗」

式神が受けた傷は、衝撃となって術者に帰ってくる。喰い千切られた衝撃は、結美にとって十分苦しいし、烏天狗は失いたくない。窮地に立たされる事は分かっているても、式神を札に戻さずにはいられなかった。結美を守る者がいなくなったのを好期と思ったのか、又エの攻撃が一段と激しくなった。

「……くっ。子蜘蛛を出すわけにはいかないし……。どうしよう……」

呟いた結美に、一瞬だけスキが出来た。又エはそれを見逃さず、尻尾の蛇で結美を襲う。その蛇は結美の左腕に噛み付いた。とつさに蛇は振り払ったが、腕に牙が残ってしまったのが分かった。途端、結美は激しい目眩に襲われた。

「……っ毒……?! 又エの蛇が毒蛇なんて聞いたことないよ……」  
目眩がさらに酷くなり、立っていることすら難しくなった結美は、地面に座り込んでしまった。その結美に、又エは虎の爪を振り上げる。思わず結美は目を閉じた。が、何時までたっても覚悟した痛みは来ない。そのかわりに、

「逃げ切れないってわかって目を閉じるのは、殺してくださいって言うてるようなものだ、って前言わなかったっけ、結美」

という、どこか辛辣な言葉と頭を叩かれる僅かな痛みが降ってきた。恐る恐る目を開けた結美が見たのは、分厚い本を手に持ち、鞘に入れたままの刀を横一文字に構えた、巫女服姿の未希だった。

「み……。未希……。あ……。あれ？ 部活は……？」

「とうに終わった。今八時。結美のお母さん、心配してたよ」

いまだ目眩の収まらぬ目で、結美は周囲を見回した。にわかには信じられない事だ。未希と結美そして又エのいるこの場所はまた夕暮れ時を演じている。

「混乱するのも分かる。ここは幻覚と共に“作られた”場所だから。ちよっと妖霊図録ようれいずろくを持って」

と言うと美希は、分厚い本、妖幽図録を結美に預けた。この図鑑、

中を見たことは無いが、未希は、佐伯家退魔の七つ道具の一つだ、  
と言っていた気がする。

と、急に又工が未希に向かって飛びかかってきた。この空間に侵入された事に腹が立ったのだろう。未希はその又工を一瞥して、刀を抜き様に真二つに切り裂いた。結美は目眩が収まるのを感じ、未希の隣に立つ。

「……………又工倒すの簡単だった……………？」

「？ まだ幻覚に侵食おかされてるの？ あれは本体じゃない。見てて未希は結美に言っと、刀を鞘に入れ、自分の前で横に構えた。そして、口の中で音にならない音で呪文を唱えながら刀を回し始めた。刀の軌道が光の筋となり、空中に五芒星を作り出す。目を丸くしている結美の隣で、未希はできた五芒星の真ん中を鞘に入った刀で貫いた。薄い氷が割れるような音と共に、周囲の景色が急速に夕暮れから夜へと変わっていく。完全に変わった後、そこは見覚えのある場所となった。

「あれ？ ここ、神社の前の空き地じゃない？」

「……………本当だ……………。まさか、ここに繋がるとは思わなかった。……………あちこち探し回ったのに……………」

何故か息が上がっている未希と話す結美の前には、幻覚の中で見た又工が横たわっている。恐らく、未希が幻覚を破壊したため、その反動で気絶でもしたのだろう。

「……………結美、封じないの？」

「え？」

「……………いいよ。……………これ、ほとんど結美が倒したものじゃない……………」  
「ん……………。じゃもう。ありがとう」

未希が結美から少し距離を取り、結美は筆ペンと札を取り出し又工を封じた。封じてから結美は、まだ息の上がついている未希の方を向き、至極真面目な顔をして、

「ところで未希、その刀持ち歩いてて大丈夫なの？」

と急に聞いた。呼吸を落ち着けて未希は冷静に、

「これは刃がないの。傍から見れば玩具同然<sup>おもちゃ</sup>。人を斬るものじゃないから」

と答えた。答えてからあまりに滑稽なやりとりに二人は笑った。

この後未希は、結美の弁護の為に彼女の家に行かねばならなかった。

## 昼の部 第一話 兄と従兄（前書き）

昼の部は外伝扱いです。が、これは物語の進行上外伝に入れざるを得なかった部分です。2・5話扱いです。どうぞ、楽しんでください。

## 昼の部 第一話 兄と従兄

結美と未希が又エと戦っている時、空き地の目立つ暗闇の路地で、二人の男が無数の異形の獣達に囲まれていた。囲まれている二人の身長は同じくらいだが、髪と目の色が違っていた。一人は、少し長いこげ茶の髪に黒目。もう一人は、漆黒の短髪に茶色っぽい目。

「おい、貴仁。奴さん、やけに多くないか？」

こげ茶の髪の男が半ば呆れながら、背後にいる黒髪の男に言った。その声の端々には、呆れながらも楽しげな雰囲気<sup>さえきたかひと</sup>が混ざっている。それを見抜いたように、貴仁 佐伯貴仁<sup>さえきたかひと</sup>が嗤う。

「ふん。楽しんでるによく言うな、拓人。……まあ、いいストレスの発散材料だが……」

ボソツと付け加えた言葉を、拓人 神崎拓人<sup>かみさきたくと</sup>は聞き逃さなかった。「へえ、ちゃんと分かってんじゃない。なら固いこと言ってるんで、行くぞ貴仁！」

「お前が俺に命令すんな！」  
拓人が、はしゃぐような声で貴仁を呼ぶ。その手にはいつの間にか、妖しい色合いの日本刀が握られていた。そんな拓人に悪態をつきながらも、貴仁は二本の短刀を出現させて、それを握る。二人の纏う雰囲気<sup>さえきたかひと</sup>が、殺気立つもの<sup>さえきたかひと</sup>に変わる。その空気の誘われるように、異形の獣達が一斉に二人に襲い掛かってきた。

口元だけの笑みを浮かべ、貴仁はまず、襲い掛かってきた獣達を両手の短刀で切り裂いた。

「鬱陶しい……。切り刻んでやる……！」

呟いた彼は、腕を交差させて振り下ろす。巻き起こった風が、獣の数をさらに減らした。激しい風だが、道路に傷は付いていない。

「ちえ。俺より乗り気じゃないか」

「黙れ。俺は早く帰りたいだけだ。……仕事で疲れた……」

「ん……。まあそうだね。仕事は疲れるし、これはある意味残業



だし」

拓人は言葉を切ると、視界の端から飛び掛ってきた獣を数匹、日本刀で切り捨てた。刀に獣の血が付くが、それを落とそうとはしない。

「……弱いものいじめに飽きた。燃え尽きろ！」

笑いながら言った拓人の握る刀に付いた血が発火する。彼は刀を振り、その火の粉を生き残りにふりかけた。残り全ての獣達それを受け、発火し燃え尽きる。数があつた割に、全滅させるのは早かつた。二人は周囲を確認し、武器を片付けた。周りには、何かが燃えたような跡も臭いもない。

「数がいたから、もうちょっと楽しめると思つたのに……。あつけない」

「雑魚で助かつた。大物にでもあつていたら面倒だつた」

「そうかあ？ 俺は、手ごたえがあるほうが良いけどな」

拓人は、貴仁の面倒くさそうな物言いに笑いながら返した。

いつの間にか、春の月が空の頂点に輝いている。そのぼんやりとした光が二人と、足音無く近づく招かれざる客を照らす。彼らはまだ、その存在に気付いていない。近づくそれは拳を握ると、未だ気付いたそぶりを見せぬ二人の頭上に勢い良く振り下ろした。が、それが殴つたのは、コンクリートの地面だつた。

「喜べ拓人！ てめえが望んでいた“手ごたえのある”敵だぞ！」

攻撃を避けて拓人に向かい、嫌味をたつぷり込めて貴仁が言った。同じように攻撃を避けた拓人は、苦笑いを浮かべるしかなかった。まさか、実際に来るとは思わなかつた。

「確かに、手ごたえのある敵と戦いたい、つて言つたよ。けど、なんで牛鬼ウシオノが出てこなきゃならないんだ。こいつはめんどくせえよ！」

牛鬼、鬼の一種で非常に獰猛な、下半身が牛の妖怪である。牛鬼は力がかかり強いため、対処することが非常に面倒なのだ。

「貴仁、た……。断る」「まだ全部言つてねえ！」

拓人が言いたいことを全て言う前に、貴仁は素早く拒絶した。しかし、牛鬼の標的は貴仁の様で、彼は牛鬼から繰り出される攻撃を前後左右に回避し続けている。

「つて、なに言ってるんだよ?! 標的はお前だろ!」

「どう考えても、呼んだのはお前だ。支援はしてやる、狩れ」

連続攻撃を回避しきって、貴仁は拓人に言う。牛鬼からの攻撃に少しの間が空いた。その隙に、彼はもう一度短刀を出す。が、それが精一杯だった。牛鬼の、成人男性の頭部ほどの拳の攻撃を、貴仁が回避するだけの時間が無い。彼はその拳を二本の短刀で受け止めた。一時、力が釣り合い、両者共動かなかった。が、流石に力の差が大きすぎた。一步、また一步と、貴仁が後方に押されていく。

「っ……。おい拓人! ぼさつとしてないでやれよ!」

牛鬼に見向きもされず、背後に佇んでいた拓人に、貴仁が怒鳴る。彼が封じているのは腕一本。いつ、もう一つが飛んでくるか分からない。しかも、この状態を維持し続けるのは無理がある。

「げっ、バレた? 大丈夫、一瞬だ!」

「! サボってやがったのか!」

「サボってた訳じゃないって。タイミング、見計らってただけ」

そのままウインクしそうな軽いノリで返され、貴仁は思わず脱力しそうになった。が、このまま力が抜けてしまえば命に関わる。危惧する前に、拓人が再度出現させた刀で、牛鬼の太い首を一太刀で切り落とした。切り口からは、血ではなく黒い霧が噴き出す。それが出て行くにつれ、牛鬼は小さくなっていき、やがて消えた。

「……こいつ、どれだけ負の感情を食ってきたんだ……?!」

「さあな、興味も無い。……それより、牛鬼が生まれていたことのほうが問題だ」

ふつと息を吐いて、拓人の疑問に貴仁がどうでもよさそうに答えた。彼らの手からは、先程まで持っていた武器が消えている。

あつ、と拓人が何かを思い出したように、貴仁に聞いた。

「なあ、貴仁。昨日の深夜、虎見たか?」

「……虎？ 又工だろ。見てねえよ。……多分、結美ちゃんと未希が片付けただろう」  
会話がかみ合っていない気がするが、拓人は、そうか、と言ってほんの少し笑った。

頭上の月はまだ輝いており、別れた二人を静かに照らす。  
彼らもまた、陰陽師。日常への、非日常の介入を防ぐ、守り人にして、最終砦。

## 参夜 日常（前書き）

どうもです。クリスマスですね。どうでもいいですが、クリスマスに何やってるんだ、と言うツツコミは無しの方向で！ 暇なんです。更新日だったのが悪いんです！！ と言うことで、クリスマスとは関係ない季節になっていますが楽しんでください。

## 参夜 日常

神隠しや虎といった奇怪事件が解決して、二人はようやく今学期に入ってまともな学校生活を送っていた。

未希が所属している陸上部は、平日の朝に、余程のことがない限り朝練がある。部員同士の仲は良く、上下関係も他の部に比べれば緩やかなのが特徴である。

その穏やかな部活の朝練の雰囲気、今日は酷く荒れている。いつものように着替えて来た未希は、グラウンドに出てそう感じた。

「あ、未希。おはよう」

「おはよう、紗季。……何かあった？ 特に男子の方」

「！ 流石は未希。良く気付いたね。……雪斗先輩、分かるよね？」

「……ああ、部長の。……？ そういえば、まだいないな。珍しい」

山本雪斗は、男子陸上部の三年で部長だ。容姿端麗で性格も良いため、先輩後輩問わず人気の先輩である。彼は部活を休んだ事がない、ということでも有名なのだ。そんな人が、もう朝練が始まるのかという時間にもかかわらず、まだ来ていない。

「実はさ、私も聞いたばかりだけど……、昨日、車に轢かれて病院に運ばれたらしいよ……」

「……それは……。だけど、それだけで男子は荒れているの？」

「うん、それだけじゃなく」そこで私語をしている二人！！ 朝練の時間だ、とつとと来い！！」

「……！ はい……」

話に夢中になっていた二人は、女子の部長、佐藤章子の怒声に首を竦めて走って行った。

未希達が朝練でしごかれている時、結美は教室でクラスメイトの斎藤美香と話をしていた。

「……昨日、山本先輩が車に轢かれて病院に運ばれたあ?！」

「結美! 声大きいって!」

「あ……。ゴメン、つい……。ん? なんか続きがありそうだね……?」

「うん。実は、その車運転してたのは、ここの不良女子だって話だよ」

「マジで。これ、陸上部が知ったら荒れると思う?」

「荒れるんじゃない……?」

実際は、学校中で話題になっている。そのことを知らない二人は、ひっそりため息を付いた。

未希と結美が顔を合わせるの、大抵昼休みである。だが今日は、運の良いことに朝会があった。クラスは違えど、始まるまでに話が出来る。そう思い結美は、生徒達で溢れかえる中庭を、未希を探してさ迷った。

「あ、いたいた。未希! おはよう!」

「……朝から元気だね、結美……。おはよう……」

抜群に元気な結美とは逆に、朝練でしごかれていた未希は、疲れきっていた。

「どうしたの、未希。滅茶苦茶疲れてるじゃん」

「……部長に、朝から特別メニューでしごかれてた……」

「特別メニューって……。何したの、未希?」

「開始時間見誤って、話し込んでた……」

「ああ、納得」

未希があまりにも疲れきっていた為、結美は本来話したかった先輩の事について話せず仕舞だった。そのうちに朝会が始まり、二人はお互いのクラスの列に戻った。

朝会はいつも通りの淡々と進み、何事も無く終わった。そして、未希は一時間目の体育のために更衣室へ、結美は教室に向かった。

更衣室の中で未希は着替えながら、他のクラスの生徒の話の聞くでもなく聞いていた。体育の授業は二つのクラスが合同で行う授業なのだ。

「雪斗先輩がさあ、車に轢かれたって話、知ってる？」

「うん、知ってる知ってる。あれって、いつコ下の不良女子が無免で運転してたらしいよ」

(……成る程。だからあんなに荒れてたわけだ……)

今年入学した一年生に、教師でも手が付けられない不良の女子グループがある。そのグループの女子達なら、無免許運転で“誤って”人を轢くなどやりかねない。許されない事ではあるがと、思った未希だが、彼女のそれは話の続きを聞いた途端、呆気なく崩れていった。

「でもやること凄いやねえ。フラれた仕返しに、人の車を盗んで、先輩の帰り道を狙って轢いて行くなんてさあ」

「なっ……!!」

思わず大きな声が出そうになって、未希は慌てて口を閉じた。周りの生徒が未希を怪訝そうに見たが、彼女は自分の手の爪を口ツカ―にぶつけたように見せかけ、周りの目を欺いた。それでも、自身の心の中に生まれた怒りは欺くことが出来ない。

(逆恨みで人を……、よりもよって車で轢くか……？ 理解できない!!)

その、何処にぶつけていいか分からない怒りは、彼女の心の底にほんのりと、吐き出されること無く溜まることとなった。

それから四時間目まで何事も無く時は進み、昼休みになった。

未希は、一時間目の衝撃的な話から立ち直れていないようで、食が全く進んでいない。その様子を見て、未希の職が進まない理由を知らない結美は、未希の体調を酷く心配している。

「大丈夫、未希？ まだ疲れてるの？」

「……まあ、そんなところだよ……。心配、しなくていい……」

「そんな様子じゃ、心配するなっつて方が無理」

結美から励ましの言葉を貰っても、未希の箸は進まず、結局弁当の中身は半分以上残ったまま蓋をされた。

「そんな状態じゃ、部活は無理だと思っよ……？」

「……だろっつな……。部長に言っつとこうかな……」

心配そうに言う結美に、気だるげに未希は返すと席を立った。その直後階段の方から、何か重いものが落ちた音と、甲高く不快な笑い声が聞こえてきた。結美のクラスは階段から近い。

その音と声に、結美のクラスメイトの何人かが教室の外へと出て行く。未希と結美も慌てて階段の方へと向かった。そこで見たのは、階段から落ちたと思われる真面目そうな黒髪の女子と、階段の上の踊り場に立つ複数の女子生徒だった。

「あはは、だつせー！ ちゃんと避けたらどうだよ、間抜けが！」

一人が、下に転がる女子に言い放つ。その言葉に、彼女の周りにいる他の女子生徒が笑う。

数人いる二年の一人が、ぐったりしている娘を慎重に抱き起こした。彼女は気を失っているようでピクリとも動かない。しかも、頭からかなりの血を流していた。

抱き起こされたところでようやく、倒れていた娘の顔が未希と結美に見えた。

「……！ あの……。ガキ共……！！」

「！ 未希、落ち着いて！」

その娘は陸上部員のようだ。未希の顔色が、誰が見ても分かるほどしっかりと変わる。感情が全く表に出ない未希には珍しく、頭に血が昇っているようだ。結美が、それに気付いて慌ててとめた。その声を聞いたのか、助け起こした二年が未希に、助けを求めるところに声をかけた。

「未希！ 丁度いいところに！ 真奈まなを抱えるから、頭支えて！

この出血じゃ命に関わる！」



「紗希！ 分かった、急ごう」

「それで助かるかねえ？ まっ頑張つてね、先輩。あはは！」

その言葉に、未希は階段の上にいる生徒を睨んだが、何も言わずに紗希が抱えた同じ部の一年、池田真奈の首から上を慎重に持ち、保健室へと運んでいった。

「……未希、めっちゃキレてたな……。大丈夫かな……」

「佐伯さんより、運ばれていった子の方が心配だよ。……助かればいいけど……」

いつの間にか結美の傍には、彼女の友達やまぐさの一人、山口京香みやまが騒ぎを聞きつけて来ていた。そして、結美の小さな独り言に言葉を返した。

「京香……。どっちも心配……。だよ……」

その後、未希は救急車で運ばれていった真奈に付き添い、病院まで共に行ったようで、五、六時間目の授業は居なかつたそうだ。そして、結美は人づてに、陸上部の今日の練習が急遽休みになったと聞いた。

この時の出来事で、未希の中に生まれた怒りは、憎しみと変わりが彼女の心に降り積もっていった。そして、それが大変なことを仕出かすのだが、今は誰にも、本人にすらも分からないのだった。

昼の部 過去編 大晦日（前書き）

こんばんわ。大晦日中に上げる予定が、新年になりましたorzく  
そう……。

と、言う訳で、あけましておめでとございます！ これからも、  
現代妖奇異聞録をよろしく願います！！

## 昼の部 過去編 大晦日

これは去年、すなわち、二人が高校一年の時の話である。

毎年、大晦日と正月の三が日に未希が暇だった例が無い。あり得ないくらい忙しいのに巫女が足りないのだ。しかし、バイトで募集しようにも、払う金が無い。人は多く来るが金は落とさない。この時期は酷く困るのだ。ボランティアで来てくれるほど、人は優しくない。

「……大晦日と正月は永遠に来なくていい……」

「……新年来るなってか……？」「うん」

巫女服のまま本殿に至る階段に座って頬杖をつき、酷く不吉なことを口走る未希に貴仁はうんざりした。毎年同じやり取りをしている。が、今回の大晦日は良い方だ。何せ、未希の陸上部の先輩が、巫女のボランティアをしてくれているのだ。何で釣ったのかを貴仁は知らない。ただ前日に、結構な量の食料を未希が買って持って帰って来たことしか分からない。

年越し参りを捌く組と正月の初詣組に分かれて、巫女服姿の陸上部員達が掃除等を行っている。未希はそれをつまらなさそうに見ていた。

「手伝えよ。先輩を働かせて、自分が動かないってどういうことだ？」

「……いいの。私は別の仕事がある……」

眠そうに答えると未希は、ずっと住居区に歩いて行ってしまった。残された貴仁は、盛大にため息をつく。忙しそうに駆け回る巫女に混じるように箒を取った。

住居区に向かった未希は台所に入った。台所の隅に置かれているのは大量の野菜と肉。コンロには水の張った大きな鍋。鍋の中には

小魚が浮いている。未希は中に浮いている小魚をすべて取ると、包丁とまな板を出し、それらが大雑把に切り、片っ端から鍋にぶち込んで火にかけた。沸騰したところで冷蔵庫から味噌を出し、ちゃんと火が通っているか確認して味噌を溶かす。

「量が量だし、味噌は足りるのか……？」

味見をしては味噌を足し、また確認する。何度か繰り返して納得いく物にすると、彼女は出来たそれを慎重に持ち、再度本殿に歩いていく。勿論、おたまと汁椀は忘れていない。この時期、夜はかなり冷え込む。暖かい物を出すのは未希なりの優しさ。……という事ではなく、これは一種のバイト代。彼女は手伝ってくれる先輩に、手料理を振舞う約束をしたのだ。

「おま……たせ……しました……」

住居区から境内まで、距離はそんなに無い。無いはずだが物凄く疲れた。鍋が大きいだけはある。

「何して……！ お前！ 何してたんだ……！」

「見ての……通り……！ 重いの！ 置かせて……！」

怒鳴るつもりは無かったが、妹が抱えている、見るからに重そうで熱そうな鍋に大きな声が出た。その声に、掃除をしていた何人かの先輩が彼女を見て、嬉しそうな声を上げた。

「さっすが未希！ 分かっているじゃん！」

「まあ……、分かっているつもりです……。お椀とおたまをお願いします……。階段に置かせてもらいますので……」

呆然としている兄を尻目に、未希は先輩にそう言った。おたまと使い捨ての椀を先輩が取ったことを確認し、鍋を階段に置く。あとは先輩達が各自でやってもらった。

未希は貴仁と少し離れた所で共に、それを眺めつつ話をしていた。

「あれが、お前のやる仕事って訳だ」

「……そう……。でも、巫女の役目も先輩達にやってもらおう」

「お前なあ……」

「だってそうでしょ？ ……妖怪あいつらを対処できるのは、私か兄さんしかいない。通常の仕事なら、全部普通に出来るでしょ？」

「まあな。 …… ……そこ、今回は結美ちゃんを除外するんだな」

「いつも巻き込むから、今回は巻き込みたくない。せめて、正月くらい静かにすごして欲しい」「そっか」

話している最中に、未希が作った豚汁は底を付いたようだ。離れた所にいる未希に先輩達が口々に、ご馳走様、と言って仕事に戻っていく。ちらっとそれを見て話しを切り、彼女はまた重そうな鍋を住居区に運んでいった。貴仁は妹の背が見えなくなると、何度目か分からないため息をつき、空を見上げた。寒空に冷たい月が掛かっている。その光は、さながら天上の霜。空気が澄んでいるようで、星は良く見える。

(明日は寒くなるだろうな)

空を見ながら、貴仁は明日、元旦の気温を予測した。月が煌々と照る夜は気温が下がる、と聞いたことがある。元旦早々雪が降らない事を祈りながら、彼は鐘の元に歩いていく。もうすぐ、除夜の鐘を鳴らさなければ、108回目を鳴らす前に年が変わってしまう。そうになったら、きっと妹は文句を言うに決まっている。彼はそうならないように、足早にそこへ向かった。

昼の部 過去編 正月（前書き）

また、遅かった……orz

新年あけましておめでとうございます。ルナサーです。

今回は新年スペシャルで突発的過去話第二段です！ 前回の過去編

大晦日の続きです。分割した訳？ 眠かったのです。と、言う訳

で本年も、よろしくお願ひします！！

## 昼の部 過去編 正月

除夜の鐘が108回鳴り、新年を迎えた。年越し参りの客もちらちら見え始めた。年越し参りをする人は多くないため、未希は参拝客を先輩達に任せて住居区に引っ込んでいた。

引っ込んでいるだけなら、それだけでも怒鳴られはしない。が、彼女はよりにもよって自室で寝ていた。

「お前……。ホントいい身分だな……！」

帰って来ない未希に痺れを切らした貴仁が、彼女の部屋まで来て寝ている妹に向かつて怒鳴った。だが彼女は、怒鳴られても起きない。むしろ、鬱陶しいと言わんばかりに布団を頭に掛けなおす始末。彼は、思いつきり布団を引っぺがしてやるうか、と考えたが行動に移さないでおいた。移したところで、今彼女がすることは無い。それなら、朝に命一杯働いてもらおう。貴仁はこめかみの辺りを押さえながら、妹の部屋を後にした。

未希が目を醒ましたのは、日が昇ってからだった。朝日に目を細めると、彼女は布団から起き上がった。

「……仮眠の予定が爆睡するなんて……。あり得ない……！」

新年早々、未希は自己嫌悪に陥ったが、割り切って崩れた巫女服を整えて部屋から飛び出した。飛び出したところで忘れ物に気付き、慌てて部屋にとって返した。札を何枚か取り、懐に落ちないように入れて、また走り出した。本殿まで、そんなに距離はない。距離は無いが気は急いている。もしも、自分と兄が動けない状態で物の怪が襲って来たらまずい。

（新年は人の欲が最も大きく出る。大群で、それも百鬼夜行でも起これば対処出来ない……！）

例年はそんな事を考える余裕も無いが、今回は大勢の巫女がいる。毎年手伝いが居れば良いのに、と要らない考えが過ぎるが、そんな

物は参道に出て見た光景で消えた。百鬼夜行ほどでは無いが、無数の物の怪が未希の目に視えている。幸い、兄が結界を張っているようで、参道に入れずにいるようだ。未希もその結界を補強し、妖怪達の目をこちらに向けさせた。

「あんまり客に手を出して欲しくないもんね、兄さん。後は狩るから任せて……」

誰に言うでもなく、未希はそう呟いた。呟いた直後、妖怪達は一斉に襲い掛かって来た。未希は一旦後ろに下がり攻撃を回避する。いつの間にか彼女の手には、太刀が握られていた。その太刀は未希の身長程あるが、彼女はそれを軽々と扱い一歩前に居た妖怪を切り伏せる。それから身体を回転させて、さらに後ろにいるモノ共も切る。返り血が白い服を赤く穢すが気にしない。くるくると、まるで剣舞を舞うように妖怪達を切り刻んで行く。

(嗚呼……、これだから太刀おもちゃを手放せないんだ……。楽しい………!!!)

我知らず微笑し、太刀を回転させる。その旋風に巻き込まれて、鬼の金棒が宙を舞った。防御も出来ないがら空きの胴体を、長い得物が切り離す。その紅い、椿のような液体が、今度は未希の顔を染める。能面の顔に血の化粧を施されても、彼女はそれを拭うことをしない。拭うよりも、斬る方が楽しい。

表情が変わらない未希が魅せる、凄絶で、残酷で、美しい微笑。殺人願望が人一番大きいからこそ、この表情が出来るのかもしれない。

何時間、戦っただろうか。最早、未希には時間の感覚が無くなっていた。妖怪の数は一向に減らない。むしろ増えている。参拝客が増えてきている所以だろう。

「……やっぱり、一人じゃ無理があるか……。そろそろ疲れた」  
独り言も減らないが、気にしてもしょうがない。彼女は懐から札を取り出した。



「来い……。かまいたち……！」

未希の声に、長い身体のいたちが現れた。かまいたちは未希の指示で風を起こし、襲い来る妖怪達を切り刻んだ。それでも数は減らない。プラマイゼロといったところだろう。未希は舌打ちをした。本気で疲れているのだ。式神を使役するのにも、精神力が必要となる。長い戦闘で集中力も切れかけている。どうしようかと悩んだ未希の身体に、ほんの少しの衝撃が走った。

「ちっ、結界を破られたのか……?!」

しかし、結界が破られたにしては衝撃が弱い。どちらかというところ、誰かが通り抜けて内側に来た、という感じだ。でも、誰か。答えは、未希に向かつて掛けられた声で分かった。

「未希！　せめて呼んでよ、暇なんだから!!」

「結美?!」

予想外であつたが、結美が来てくれて助かった、とも思った。兄が来て同じように思っただろうが、結美が来てくれたことの方が何故か嬉しかった。太刀を持つ未希の背に結美が立つ。

「いつも通り、頼つてよ。友達なんだから」

「そう……だね……。今年は、一人で大丈夫だと思つたんだ」

「その結果が……苦戦？」

「言えてる」

先の戦闘で浮かべていた微笑とは違う、穏やかな微笑。それは傍から見れば、単なる無表情。

かまいたちを札に戻し、別の札を取り出す未希の背中で、私服の結美も、手提げカバンから札を取り出した。

「来て、百目鬼」

「おいで、空狐」

未希が召喚したのは全身に目が付いている鬼で、結美が召喚したのは全身白いが足の先だけが青い狐。それぞれが使役している式神に目標を示す。式神達が攻撃を開始したのを見計らって、結美が未希にぼつりと呟いた。

「遅くなったけど、明けましておめでとーございます。これからも、よろしくね」

「……こっちこそ。……これからも、よろしく」

「いい年になると良いね」「……うん……」

この年が、酷く波乱万丈であることを二人はまだ知らない。それを知るのは、新学期入ってすぐなのだから。

昼の部 過去編 正月（後書き）

正月ネタじゃない……orz  
来週から本編に戻ります！

## 四夜 人形

人形・人形。にんぎょう ひとがた 人に近い姿の玩具にして依り代。人に近いそれは、時に人の思いを、時に秘めたる欲望を、強く受けて取り込む。祭事のように厄災を引き受けて流されるならともかく、玩具として置いてあるものがそれらを取り込んだら、一体何を起こすのだろう……。

病院に見舞いに行つた帰り道は、夕暮れの光で満ちている。どこか物悲しいその道を、未希はジャージ姿で一人歩いていた。

真奈が病院に運ばれ、そのまま入院してから二日。まだ、意識は戻っていない。同じ病院に入院している雪斗は、足を骨折していたそうだが、もう病院中を歩きまわっていた。その場に偶然居合わせ、未希は呆然と立ち尽くしたものだ。

(回復力が尋常じゃない……！ 真奈だつて目を覚ましていないのに……)

ぶつぶつ言いながら、未希は自宅に至る長い階段を、夕日を背に上っていく。やっと上りきったところで、神社の境内に、兄の貴仁と見知らぬ中年で小太りで茶髪の女性が話しているのが見え、その声が聞こえた。

「だからうちの神社は、人ならともかく、人形の厄払いなんてやってません。他を当たってください！」

「でも、ここしかないんです。お願いです、この人形を払ってください……！」

「人形供養してくれる所を探してください！」

「供養なんて、そんな……！ この人形は家宝なんです！」

堂々めぐりの会話だった。未希は関わらない様に、そつと通り過ぎようとしたが、未希は、知らず知らずのうちに抱かれている日本人形を見ていた。

一見普通の人形だが、単に汚れた、とは思えぬ程黒ずんでいる。

黒い絵の具で、目もと以外のすべての白い肌を塗りつぶしたような感じだ。……もつとも、それは未希の目から見たもので、普通の人間が見れば、おかつぱ頭の可愛らしい人形だ。

「とにかく、これが呪われている限り、家族は安心して……。貴女、さつきからジロジロと、何ですか?!」

(……見つかった……)

「だから、神社（やしろ）に言わなくても……? お、未希、お帰り」

「この娘は誰ですか?!」

「俺の妹です。って、それは関係なんで、お引き取りください!」

「……その人形……。私が被（か）おうか、兄さん?」

「未希?!」「え!?!」

急に、未希は突拍子のない提案を持ちかけた。それに、貴仁は絶句し、女性は喜びの声を上げた。

「本当に、本当にやってくれるんですか?!」

「……被（か）うには被（か）うが、人形の無事は保障しない……」

「それは構いません……。お願いします……。この人形が夜な夜な動くので、怖くて、怖くて……。!」(……怖いなら捨てるよ……)

さつきの未希に対する態度はどこへ行ったのか、女性は未希に人形を預けて被（か）つてくれるよう懇願してくる。この豹変の仕方に未希は心底驚いたが、それは全く表に出さない。

「……分かった……。兄さん、その他の事は任せる……」

「っ勝手に決めやがって……。! ……分かった、やっといてやる。

準備して来い……!」

兄を無理矢理納得させると、未希は預けられた人形を抱えて神社の住居区に向かった。

未希の自宅は、この上弦町で唯一の神社、佐伯神社だ。町の名は上弦町だが、何故か上弦神社という呼ばれ方をしない。これは町の七不思議に数えられているそうだ。後の六つが何なのか非常に気になるが、生憎未希は知らない。

さて、自室で巫女服に着替えると未希は、必要な札を懐の中に入れて、預けられた人形

を持って出てきた。神社の方に戻ると依頼主は既に居らず、貴仁が一人、暮れかけの日の光と満開の桜を背に佇んでいた。

「依頼主は？」

「帰った。三日後にまた来るそうだ」

「そう。そんなに掛からないのに……」

「まあ、そこは気にするな。それより、結界の方の準備は出来ている」

「ありがとう」

貴仁が指した所は参道から外れた部分で、そんなに大きくはないが、石を角の頂点とした五角形が作られていた。

未希がその五角形の中に入り、貴仁は五角形の頂点である石が全て見える位置に立つ。妹は自分に向かい合うように人形を置き、兄はそれを合図に五枚の札をそれぞれの石に投げた。五枚の札がそれぞれの石に張り付いた途端、その石から地面に光の線が走り、五芒星を作り出した。

「終わったら、内側そっちから解除できる。……言っただからには、やり抜けよ……？」

「分かってる……」

未希が何か言う前に、光の壁が二人を隔てた。彼はゆっくり深呼吸すると、その場に胡坐をかいて座った。

結界の中は様々な色が飛び交う、それでいて眩しくない世界だった。

未希は向かいの人形に、懐から札を出して投げ付けた。それは一度、額の辺りにふわりと張り付く。未希は誰に言うでもなく呟いた。「さて……。いつ出てくるかな……」

札をつけて数分。突然札の周りから、黒い霧の様なもやもやしたものが溢れて来た。それは次第に、人形を包み込んで大きくなって

いく。そして、未希と同じくらいの身長へとなり、張り付いたままの札を破り捨てて未希を見た。

『なんでえ……、私を引き離れたのお……？　もっと綺麗になれる好機だったのに……』

着物を着た人形は、身体を蛇のようにくねらせて未希に迫った。可愛らしい人形だが、取り憑いている思念はどうやら、二十から二十代後半の女性のようだ、と未希は予測した。

「……着飾る必要がどこにある？　服なんて、暑さ、寒さを防げればいいだろう？」

『女の癖に、何も知らないのねえ……。貰った人形（この子）は綺麗にしたい……！　みすばらしい私を見ないでええええ……！』

一人だと思った思念は、実際には三人だった。そして、人形に宿った思念のうちの一人が、狂ったように絶叫しながら巨大化させた腕を未希に向かって振り下ろしてきた。彼女はそれを右側に避け、懐から札を取り出した。それに息を吹きかけ刀に変化させる。腕を引いた人形は、今度はけたけた笑いながら着物の帯を取り、それを両手に持った。細い胴体の割に、帯は長い。その帯を鞭のように撓らせ、刀を持って走りこんできた未希を攻撃する。

「当たると思ふなよ、人形……！」

彼女は直線的で単調な攻撃を左右に避け、突きの構えで人形に肉薄する。が、あと一步のところどこかに引つ張られ前のめりに倒れこんだ。

『うふふ、私に近付くことは出来ないわあ！　人形（この子）に近付かないで……！　私を見ないでええええ……！』

「くっ……。思念共が鬱陶しい……。それに、何が引つ張っているんだ？！」

引つ張られながらも立とうとした未希の足を、それはさらに力を込めて引つ張り、逆さで宙吊りにした。引つ張っていたモノは、避けた帯だった。片方は足に絡まり、もう片方は蛇のように鎌首を上げて未希を狙っている。彼女はそれらを感情の無い目で見ていた。

傍から見れば、余裕がある、と勘違いされてもおかしくない。この時もそうで、人形に宿ったそれぞれの思念は未希の余裕を笑った。

『余裕ねえ……。もつと綺麗に……。見るなああ！』

「……一人で喋ってくれないか……？」

少々苛立ちの混じった声で呟くと、未希は足に絡む帯を、身体を翻して切り刻み、下に降りた。鎌首を上げた片方が激昂したように襲ってきた。が、未希はそれも何の躊躇いも無く切り刻む。

『ああああああ！！』

思念の一人が狂った声で悲鳴を上げ、切ってもまだ長い帯が力を失ったように落ちた。が、すぐに帯は先程のように鎌首をもたげる。「やはり、帯に宿っていたのか……。だけど……欲しいし、どうするかな……」

未希が、欲しい、と言っているのは式神のこと。だがこれも、傍から見れば余裕綽々だと勘違いされてもおかしくない行動。案の定、思念達の感情を逆撫でた。

『その余裕！ 今度こそぶった切ってやる……！ よくも人形（この子）を傷つけたな……！』

本体からの声は残り二つ。怒りを露にした人形は力強く帯を振る。今度は直線的ではなく、不規則な動き。そのせいで、帯の軌道が読めない。未希は踊るように帯を連続で避けるが、攻撃が激しく近づけない。しかも、人形の高笑いが周囲の壁に反射して大音量となって未希の聴覚を奪う。

元々、この壁は何も反射しないはずだが、どうやら人形はその妖力で壁の質を変えたようだ。

「っ……、まさか、本気にさせたか……？」

呟いた一瞬の隙に帯が二本、未希の胴体を強かに打った。怯んだ足が、二、三步更に後ろに下がる。それに気をよくしたのか、更に帯は動きを不規則にして未希を襲う。今度は一発避けられず、刀を持つ左腕に当たった。当たった部分の服が裂け、血が噴き出した。いつの間にか、鞭から刃に変化したのだ。



「あなたの血で、もつと美しく……！もつと可愛くなつて、私の人形……！」

「ちっ、鬱陶しいな……！喋るなら一人にしろ！」

耳が痛くなるような音量の中で、それに負けない位の声で叫んだ未希は、懐の中から新たな札を取り出し、それを結界の壁に向かって投げた。その札が壁に張り付いた途端、周りを反射していた人形の笑い声が消えた。人形がそれに驚いたように、帯での攻撃を止める。

「音は……、邪魔だ……！！」

止まった人形に、未希は再度刀を構えて迫る。慌てたように帯を振ってきたが、未希は見切る気が無いのか、避けようとしない。頬に、肩に、横腹に、足に、赤い線が走り、下に緋い花が咲く。それでも未希は駆ける足を止めない。

「くっ……、何なの、アナタはあ！！やめてえええ！」

人形が叫ぶが、それも聞いていない。未希が突き出した刀は、綺麗に人形の胸に刺さった。若い女と幼い少女が同時に悲鳴を上げ、黒い本体は刀が刺さる直前に投げられた札の中に吸い込まれた。

「……私は……。私は、単なる陰陽師だ……」

消えた思念に答える様に未希は呟き、奇跡的に無傷な、小さな日本人形を拾い上げた。

結界を内側から解き、戻ってきたら夜だった。おぼろげな月光の中に、満開の桜の花びらが踊っている。

貴仁は戻ってきた傷だらけの未希と、抱えられた無傷の人形を見て、ほっとすると同時に苦い顔をした。

「その傷……どうするんだよ……」

「……包帯を巻いていればいい。浅いから大丈夫」

平然と答えた妹に、兄は密かにため息を付いた。

この三日後、依頼主が来て、無事怨念を祓った人形を嬉しそうに

持って帰っていった。人形に傷が入っていなかったことも喜びの  
因だったらしい。人形に宿った思念が何だったのかは、結局分から  
ず仕舞いだった。が、未希も貴仁もそれを気にする人間ではないた  
め、調べることはなかった。

## 伍夜 夜道

日が落ちれば、道に訪れるのは宵闇。だが、そこに光あかりが無い訳ではない。小さいながらも星が瞬き、自ら輝かぬとしても月が掛かる。人工の明かりがあつても、宵闇の道に潜むモノは照らせない。

部活があつた結美は、バイト以外では久しぶりに、帰りが遅くなつた。

桜は満開だつたが、今日降つた雨によつて殆ど散つてしまつた。雨は帰る間際まで降つていたが今は止み、暮れかかる陽とその反対側に月が見えている。そんな道を結美は独り言を言いながら歩いてた。

「あゝ……。もう、結局いいのが書けなかつた……」

彼女がぶつぶつ言っているのには訳がある。彼女が所属している書道部で、そろそろコンクールがあるのだが、そこに出すのに一番良い物が書けなかつたのだ。提出期限までまだ時間はあるが、早めに終わらせてしまいたかつたのだ。

そんなことを考え、時にため息を付きながら、暗くなり始めた道を行く。その途中、何かが背中に乗つたような気がした。

「……？ 何だろう、何か背中に乗つたな……」

結美は後ろを向いてみたが、何も見当たらない。電灯の明かりで出来る影にも、それらしいものはない。

気のせいか、と家に向かつて歩いて行く。が、どんどん背中の方が重くなつて行く。

「ぐっ……。なんだ……。重い……！」

「お？ 結美。今帰りか？」

「……！ 拓人兄さん！」

そのまま重さで動けなくなつた結美は、路上でたまたま自宅の隣に住む従兄妹の拓人とはち合わせた。

「今日は遅いんだ…… なっ!? おまつ、何を背中に乗せてんだよ!!!」

「! やっぱり……。拓人兄さん! その背中に乗っているモノ、なんとかして! 重い……!」

「お……。おつ、任せろ……。! 首下げろよ……。!」

結美は拓人に言われた通り、首を下げた。拓人は刀を出現させると、慎重に構え、再度結美に忠告する。

「絶対に首上げるなよ! 何がなんでも上げるなよ!!!」

「わっ……。分かつてる……。! 兄さん早く、重い……。!」

更に念を押し、拓人は刀で結美の背に負ぶさっているモノを切り裂いた。切られたモノは、地面に転がりすぐに消えた。

結美は、背中通り過ぎて行った風に恐怖し、体を起して悲鳴交じりに拓人に迫った。

「につ……。兄さん! 一体何で背中中のモノを落としたの?! なんだか凄く怖かったんだけど!」

「……。ああ、刀……。つて、怖かったって酷くね? 背中楽になっただろ?!」

「楽になっただけど……。! 結構怖かったよ……。? 武器なら武器って先に言っただろ?」

「うっ……。悪かった……」

結美はやつと息を吐くと、背中を伸ばした。重さで前屈みになっていて、若干背中が痛い。後もう少しで、重さに耐えきれず押し潰されるところだった。

ふと結美は、自分の背に乗っていたモノを見ていないと思い、その姿を見たであろう拓人に聞いた。

「ところで、何が乗ってたの?」

「えっと……。なんかよく分らない形の何か」

「……。何それ?」

「多分妖怪」

拓人は、彼女の背に乗っていたモノを妖怪と見破ったが、その名

前までは分らないようだ。

「……一体何だったんだろう？ 未希がいたら分るんだけど……」

「お教え致しましょうか？」

「うわあああ！！」

突然二人の後ろから、どこか落ち着いた、低い男の声がした。その予想外の声に、二人は揃って大声を上げた。上げてから、近所迷惑と夜であることを考え、口を閉じる。後ろから声を掛けた男は結構うな垂れていた。

「そんなに驚かなくても……」

「いや、暗い道で後ろから声掛けられて、驚くなって言うほうが無理」

どこか派手、というか豪華な和服を着た長い黒髪の男に、拓人はさらりと正論をぶつけた。さらにな垂れた相手に、続けて言おうとする拓人を押しとどめ、結美が言う。

「まあまあ拓人兄さん。で、何を言おうとしたんですか？」

「……貴方の背に乗った物の怪についてです……」

まだ立ち直ってないものの、男は結美の問いに答えた。物の怪についてと聞き、拓人は文句を言うのを止めた。

「知っているのですか？」

「はい。あれはオバリヨン。夜道で人の背に負ぶさり、どんどん重くなって負ぶさった者を押しつぶそうとするのです」

何と無く解りやすい。結美と拓人は納得したように頷いた。

「成る程、オバリヨンっていうのか……」

「……お前、博識だな……」

「いえ、それ程でも……」

さっきまで頂垂れていたはずなのに、この開き直りの早さはなんだ。拓人もどうやら認めたらしい。

しかし、二人はこの男の名を知らない。結美は一応聞いてみた。

「ところで、あなたは誰なんですか？」

「これは失礼しました。私はオモイカネと申します」

「オモイカネ……？　ありがとうございます、オモイカネさん」

『いえ。それでは、失礼します』

オバリヨンの説明はしても自己紹介はせず、彼は一礼して姿を消した。その消え方はまさに、霞のようである。二人は驚かざるを得なかった。

「オモイカネって、何者？」

「さあ？」

結美と拓人は互いの顔を見合わせ、首を傾げた。が、消えたものは仕方ない。

ふと結美が空をみると、そこには満月に少し足りない赤い月が掛かっていた。赤い月は不吉とされている。

「……赤い月……」

「ん？　本当だな。……百鬼夜行には程遠いな……」

「百鬼夜行？」

「いや、こつちの話だ。さあ、とっとと帰るぞ。おばさん、心配してるかもな」

拓人は結美の問いをうやむやにし、悪戯っぽく言った。結美は、苦手な母親のことを話題に出されぞつとし、笑いながら走りだした。従兄を追って走り出した。

結美達が家に着いたのは遅かったが、拓人が共にいた為、ひどく怒られることは無かった。

オバリヨンを説明して消えたオモイカネは、日本神話の石柱で、知恵の神だ。有名な話だと、スサノオの乱暴に嫌気がして閉じ籠ったアマテラスを、引きずり出す際に知恵を貸したそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0461z/>

---

現代妖奇異聞録

2012年1月14日11時46分発行